

「わが庭の四季」

庭の木々

梅雨嵐 止みて息づく庭木立
我庭の万縁の中我想う
雷雨果て万縁いよよ歎らみぬ
庭に佇ち吾も万縁の息をせり
金木犀香る戸口の立ち話

来客に又金木犀の話し継ぐ



庭の木々 深緑して風の止む

ふかみどり

銀杏落葉

熟柿食う幼き頃と同じ味

じゅくし

天高く家も守りし木守柿

木守柿夕陽の中の高さかな

今年こそ妻の精魂吊るし柿

圓栗の落ちる音して命継ぐ
圓栗が落ちて前世の夢終わる

青柚子に雨滴りて光りけり
柚子割れば乳房のごとく撥ね返る
巨峰の実小さけれどもわが小庭
春の庭見終えて友は密叩く

薄紅の桜がり日々に梅含む



梅



紅梅に風 白梅に風我も風

こうばい

はくばい

梅の実の落ちておのれの彩となる

梅の実は紅装^{ベニ}いて風を待つ

梅の実の薄紅纏^{うすべにまこと}う夜となる

梅の実の女色して地に落ちる

実梅採る落とさぬよう両手添え

蠟梅の香り小庭を守りけり



蠟梅

蠟梅は庭の戸口を守りけり

蠟梅の香り嗅ぎ分け 庭の妻

庭の妻 蠟梅の香を持ち帰る

つばみ

桃の芽の蕾彈^{ハタフ}けず今日も又

桃の芽に待ちかねる赤一つあり



花桃

桃咲いて小庭に春の來たりけり
薄桃の色散り広がりぬ桃の里
早暁の庭の桃の香 しきりなり

ゆうやみ

夕闇て 白木蓮の薄明かり

もぐれん

白木蓮の色現れて夕間暮れ

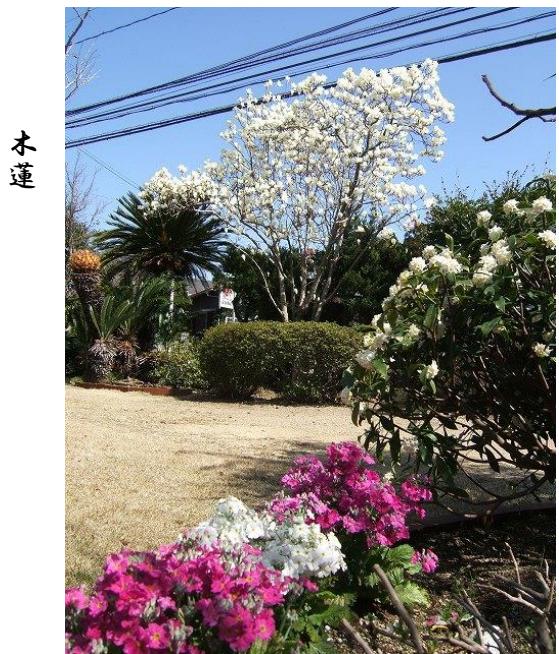
暮れてきて白木蓮の夜となりぬ

明日満闇 白木蓮は夜ひかる

はくもくれん

満闇の前夜のひかり白木蓮

木蓮の花の外灯庭明かり



木蓮

白木蓮の夜の光は明日の爲

白木蓮 夜のテノール響きおり

ことごとく空に叫びし花木蓮

木蓮の空に叫びて花哀れ

木蓮の花騒ぎ立つ未明かな

空に向け白木蓮の大合唱

白木蓮午後の濃き陽に高笑い

白木蓮空に近きが崩れ始む

木蓮の一片また一片と散りにけり

ひとひら

ひとひら

葡萄の実 日々に膨らみ 雨しだく

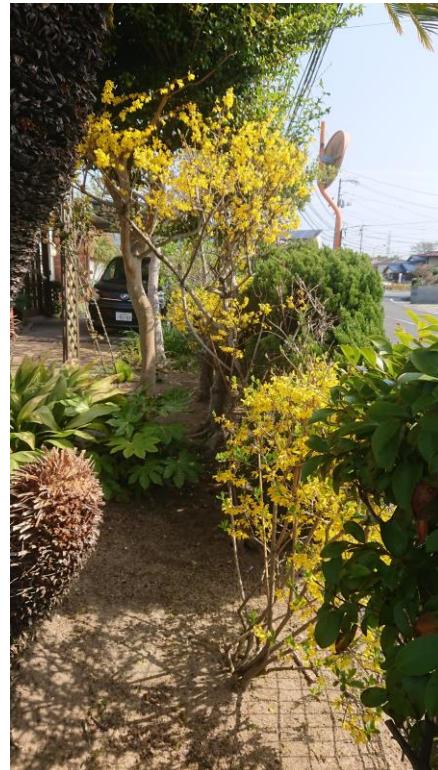
ひとひら

ひとひら

今生きる 葉光鋭き青紅葉

あおもみじ

連翹に飛び立つ色もありにけり



連翹

大椿慎ましきまま落ちにけり

大椿夜つびて乱れ落ちにけり

散りてなお命蟲く椿かな

寒椿かぜに吹かれぬ高さまで

落ち椿またひと叢の落ち椿

蒼天に木立鎮まる梅雨晴れ間

山茶花の散り敷く辺り陽の溜まる

さ
ざ
ん
か

あ
た

昨日今日桐の大葉の落ち続く
きり

煙り雨 無花果青く光りけり
寒風に大裸木となりにけり
黄落や来し方目指す動きあり

花石榴醜女となるは散らざりき
秋天に残り石榴の紅ひとづ
物騒な世なれど石榴熟れる日々
降り積もる石榴の花の道を踏む



山茶花



山桃の記憶そのまま子に伝う

山桃の匂う小径に入りにけり

幾万の山桃落ちて転生す

風騒ぎ山桃熟れて落ちにけり

桺の瘤 声して數多子を飛ばす

藤棚に座れば漏れ日斑なり
まだら

風に揺る姿に咲きし藤の花



藤の花

藤房を掴みカナブン揺られけり
南風藤の落花の思うまま

風のまま藤の花房揺れており
藤の房垂れて窓越し匂い立つ
藤房の揺れて日溜り動きだす
藤房に光溜まりて零れけり

白藤や漏れ陽斑まだらこぼに零れけり
白藤の花落とす頃匂い濃き
白藤の散り急ぐ日の賑わしさ
白藤の散れば小風の残りけり

藤枯れて残る鳥の巣現れにけり
あ

この庭を統べて蘇鉄は実を零す

さるすべり

百日紅ひたすら高く花のあり

さるすべり

百日紅花悉く高く咲く

さるすべり

山法師白きクルスの響き、今い

山法師



山法師朝の暗さに白き花

やまほうし

小糠雨 花弁またたくヤマボウシ

こぬか

木漏れ目に花弁は真白 ましろ

あかね

夕映えに白さるすべり茜差す

紅の路のかくまで遠き百日紅

べに

高空の白さるすべり雲になる

百日紅



東雲に白く燃え出づヤマボウシ
山法師白き静寂続まりあり

たまごひこぶ

夏蜜柑剥けば太古の掌

春の陽の命尽くして辛夷散る